

『築地市場再整備に対する考察』

まず最初に、私の立場について明確にしておきたい。

私は二十代半ばから四半世紀二十五年を、築地市場で過ごしてきた一肉体労働者であります。場外の卵焼き屋「松露」、鮭問屋「越後」をはじめ、中央魚類小揚での深夜の荷卸しも経験し、仲卸業の海老屋、寿司種屋、珍味屋と、マグロ屋以外のほぼ全種類の店舗においてアルバイトという形でかかわってきた者であります。

現文部大臣の川端氏は、高校の先輩、細野豪志氏は後輩にあたります。

しかし、「民主党支持者」ではなく、いわゆる無党派・政治無関心の部類の者であります。以上のことから、まずご理解願いたいのは、「築地市場のことは知り尽くしている」ということ、「知的レベルは低くない」ということ、「政治的な思惑はない」ということであります。

昨今の移転問題を見てみると、「利権」や「権力」が見え隠れしているようで、真に「食の安全確保」「築地市場の活性化」を第一義として考えているようには思えないところがあります。

これは多くの市場労働者が口にしてのことであるが、「移転と築地再開発でウマイ汁を吸う奴らが必要になっていくだけで、奴らは食の安全、市場の活性化などどうでもいいんだよ。現場を知らないお偉いさんたちに何がわかる？」と半ば諦め気味に話しているのが現状である。

そこで、私の考えであるが、結論から言えば、

「現在地での再整備がベスト」であるということです。

まず、移転予定地である豊洲については、「不適格」以外の何物でもないということ、発ガン性物質、劇物の濃度が高まりにも高く、土壌汚染の程度は許容範囲を大きく超えてしまっており、食品を扱う場としても危険であるばかりでなく、そこで働く人間の健康被害も懸念されるからである。

都の職員は「何の問題もありません」の一点張りで、「まず移転ありき」という都の方針を遂行するための答弁しか用意していない。

専門家の意見は「しかるべき処置をとれば、豊洲の安全は確保できる」というものといかなる処置をしても危険はゼロにはならない」というものに真っ二つに分かれているようだが、ここで勘違いしてはならないのは、10人のうち、たとえ9人が「問題ない」と言ったからと、多数決で決定して良い事案ではないということである。

ことは人の命、健康に関わることであり、ほんのわずかでも疑いが残る限りは「GOサイン」を出してはならない、非常にデリケートな問題であるということだ。

そもそも、土地を購入してから安全を確かめるといふ手順もお粗末だし、よりによってナゼ、食を扱う場合に、普通以上に気汚染された地を選ばなければならないのか？

理解に苦しむとはこのことだ。

汚染された土を何メートルも掘り出し、新たに何メートルも盛り土をするという案は、どう考えても税金の無駄遣いである。

地下深くまで染み込んだ毒物は必ず気化して地上に出てくるに違いない。

そこで毎日、何時間も、何十年と働いていけば、必ず健康被害が出るだろう。その時に、一体誰が責任を取るのか？

「問題ありません」と繰り返す都の職員が責任を取ってくれるとは思えない。試しに「都の職員の住居やその子供の保育園や公園も豊洲に建てる」と言ってみればいい。

「何の問題もありません」などと口が裂けても言わなくなるだろうか。

「豊洲への移転は不可」という議論はここまでとして、では具体的に「再整備」をどうするか考えてみることにしよう。

「移転派」が持ち出す意見・理屈のひとつに「現場での再整備は一度試したができなかった」というものがある。

このことを根拠に再生には不可能だというのであるが、これは「現状」にそぐわない。私が築地市場で働き始めた80年代半ばは、確かに「再整備は不可能」な状況であった。通路があったターレーや小車でギッシリ渋滞して、30分も動かないことが珍しくなかった。

延着の長距離トラックがセリ場横に列をなしてゴツタ返していた。

とにかく「超過密」状態であった。

そういう状態の時に「再整備を試した」からできなかったのである。

築地の状況はここ10年で激変している。

まずバブルがはじけて、売り上げが下落した。「接待」に代表される「食」への潤沢な支出が抑えられたせいである。

同時に株価や不動産価額が急落したことで、本業以外に手を出していた大店の経営が傾き始めた。

家族経営の小さな店舗は本業以外に手を出さなかったので生き残ったが、利益の大きかった店に限って、株、土地価格の下落で大きな損失を被ったわけである。従業員の多い店、つまり大店は、収益に対する人件費の比率が多いため、次第に負債を抱え込むようになり、「倒産」する店が相次いだ。

店舗価格が相撲の年寄株同様、一店舗当たり「億」といわれた時代には、つぶれる「仲間」など聞いたことがなかった（現在は一店舗1千万以下らしい）

それがここ10年で「ヨモ七」「大喜魚類」「三興魚類」「カネサン」「原由」など、羽振りが良いことで有名だった大店をはじめ、次から次へと閉店や倒産に追い込まれて、あちこちに「空家」となったスペースが見受けられるようになってしまった。

休日前や休日明けも死ぬほど忙しい状態になることなど皆無となり、市場内よう一般の素人が自由に歩き回るほど、ガラガラになっているのが現状なのである。

子供連れの外国人やカートを引いたおばさん、時には車いすまでもが場内の売り場に入り込んでいる光景など、20年前には想像もできなかったことである。

その現状を踏まえて、「今なら現場での再整備は可能である」と断言できるのである。築地で働く者なら誰でも同意見であるはずだ。

そこで私の意見であるが、まず、有能な建築士を5名なら5名、長期にわたって専属契約する。報酬は通常の業務で得られる収入の2倍でも構わない。そのかわり、「築地再整備」にのみ特化した仕事を徹底してもらおうのである。

まずは半年なら半年、徹底して現場調査し、細かい計画を練ってもらおう。(イメージとしてはテレビ番組の「ピフォーアフター」のように現場を完全に理解した上で、より有効、より使いやすい工夫も考えに考え抜いて形にしてみよう) その際、現場で働く者の意見も可能な限り取り入れるようにする。

そして、市場全体を例えば20分割なら20分割し、一区画ずつ丁寧に整備し、建ててゆくのである。

その間、その区画は使用できなくなるわけであるが、別の場所での作業は可能と考える。全体の完成には10年以上かかるだろうが、長い目で見れば何の問題もないと思う。

古き良き遺産して残すべき部分、例えば石畳のような通路であるとか、「茶屋」の「たたずまい」であるとか、そのような点にも配慮した上で、荷物運搬のための通路の整備、あるいは、毎日大量に出るゴミ処理の設備などをしっかりやってもらうように願いたい。

また、外国観光客をはじめとする「マグロのセリ」の見学者に対する設備も必要であるう。

今や京都をも凌ぐ観光地のトップとなった「築地市場」は、連日、多勢の観光客が押し寄せる、まさに東京の名所となった感がある。

これらの観光客を、ただ「邪魔だ」と拒否してもいけないだろう。

我々、市場関係者は「素人」(一般客をこう呼ぶ)が決して嫌いではない。

酔っ払いやイチヤイチャして回りが見えないバカッパルは嫌いだ、節度ある部外者ならむしろ歓迎である。

不思議なもので、自分たちの働いているところを見られるのは誇らしく、ちょっと嬉しいことであつたりするのである。

このあたりは、「ツアー会社」とも連携して、うまくやっていけるはずである。

今は景気が低迷し、今ひとつかつての活気のない築地ではあるが、人々の食に対する関心、興味はそんな中でも旺盛である。

「築地市場」発信で、「食」から拡がる景気回復の実現も夢ではないと考えている。

これは私のまったく個人的意見であるが、「築地市場」は「決してなくしてはならない一種の文化遺産」と思う。

「汚い」「ゴチャゴチャしている」「アブナない」という側面も含めて、魅力なのであり、これが味も素っ気もない「キレイ」な施設となったのでは誰もわざわざ訪れないだろう。

たまたま我が母校、滋賀県立彦根東高校には、老朽化に伴い、建て替えの話が出ているのだが、その際には現在地である彦根城の外堀と内堀の間ではなく、城の敷地外への移転を一部市民から求められているということである。

しかし、県下最古の伝統ある高校は、今現在の場にあつてこそ母校であるという卒業生たちの強い反対運動が起こっているそうだが、一度なくしてしまったら最後、二度と取り戻すことができない大切なものがあるということを理解すべきである。

「築地市場」は「築地」にあつてこそその「築地市場」であり、これを守ることは意義のあることである。

民主党政権が危うくなっている今、「築地再整備」を実現することは大変意義深いこととなるはずだ。

後世、「いい仕事をした」と必ず言われることになる。私はそれを信じて疑わない。

以上

具体案に欠けるという指摘があるかもしれませんが、「現在地での再整備は可能」であり、築地市場の現在地での存在意義ははかりしれないものがあるということを訴えたい。

四半世紀、築地で働いてきた者として、「再整備は可能」という考えは、単なる希望的観測ではなく、ある種、確信的なものであることを銘記しておきたい。